

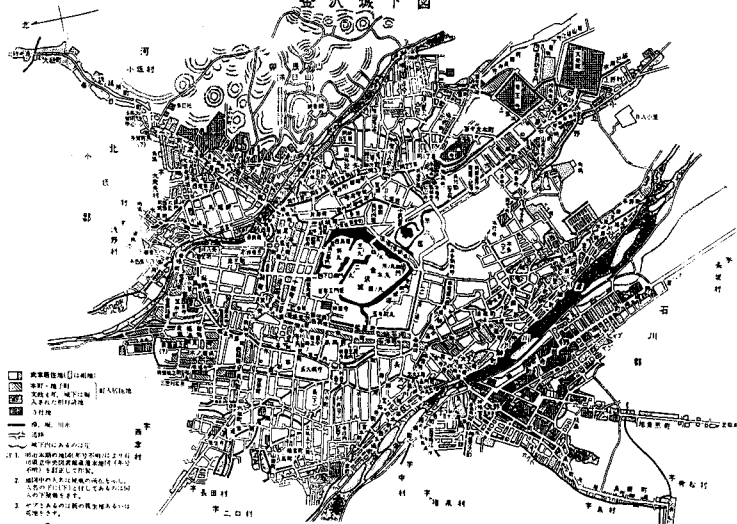
金沢工業大学 正 員 中川武夫

金沢工業大学 学生員 古池 久

金沢工業大学 川本憲夫

金沢工業大学 石田都喜

金沢城下図



1. 緒言

1)

金沢城下図を右に示す。この絵面から、浅野川と犀川が金沢城をそれぞれ東面から西面へ、用水が城下をくまなく流れている様子が理解できよう。

浅野川と犀川は、古くはともに大きな河原を流れていたが、本格的城下町建設

のため元和(1615~1623) 年間の坂井

就季を奉行とした護岸工事の結果、現

在ある河川の原型ができたといわれる。

これに先立って、慶長四年(1599) と

慶長十六年(1611) にはそれぞれ内堀構造と外堀構造が徳川家対策の一環として既に完成していた。

これらの外堀の外側には図示のように辰巳、藪月、大野、泉、中村、高島、小橋として中島の各用水が以下に述べるような目的と用途のために掘られた。

本論文は、藩政期に金沢城下の用水がどのような目的でつくられ、また、実際にこれらの用水がどのように用いられていたかを明らかにするにとりその主要目的とする。

2. 用水の目的と用途

3)

江戸の玉川上水や赤穂の赤穂水道に代表されるように、藩政期に他藩とつづらねたほとんどの上水道または用水が飲料水としかんがえられなかったことはその目的としていたことに對して、金沢城下の用水が、以下に述べるように、かつおに多くは目的に達しなかったことは最近とくに注目を集めている水資源の有効利用という観点から注目される。以下に、金沢城下の用水の目的あるいは用途を列挙し、そのおのおのに関連していくらかの考察を加える。

(a) 軍事用： 金沢城は自然の堀割である浅野川と犀川の存在によって東面方向からの攻撃に対しては強固であったが、南西方向からの攻撃に対しては弱い弱であった⁴⁾。この理由のため、慶長年間には内堀の外堀構造が掘られたわけであるが、さらにこの弱点を補うために辰巳、藪月、大野の各用水が建設されたものと考えられる。

(b) 飲料用： 三代藩主利常は徳川家による金沢城攻撃を想定した場合に、籠城の際に必要な飲料水等の水の補給源として従来のように井戸のみに頼ることに不安を感じたようである。そのため、

利常は小松の町人板屋兵衛に命じ辰巳用水を寛永九年(1632)に完成せしめ、犀川と流から小笠野台地を経て、兼六園・露ヶ池にいったん溜められた水は鉢越しの理(逆さうフオンの原理)により、蓮池堀の下をくぐり、城内にのれまで導かれた。この辰巳用水に限らず、浅野川、犀川及び露ヶ野、小松の各用水の水は飲料用としての用途があった。

(c)防火用：藩政期、金沢城下では火災が頻発していた。辰巳用水が寛永八年(1631)の法船寺大火の直後である寛永九年(1632)に工事を着工していることから、この用水が防火用としての用途をもっていたことは明らかである。藩政の火災に対する主要関心はその居城及び象徴の屋敷の焼失をいかに防ぐにあった。このため、城は白鳥堀、蓮池堀(白間堀)、蝶堀により一帯を囲繞してその外側を内堀の総構堀により囲まれていた。一方、武家屋敷群は小笠野と辰巳、露ヶ野、小松の各用水路により分離することによって、その延焼面積を極限するように工夫された。

(d)排雪用：城下町形成初期には、堀、用水はいずれも敵に対する要害としての役割が重要視されていたために、これらを排雪のために用いることは厳しい制限が加えられていたが、時代が下り外敵に対する不安が減少する一方、城下における経済活動が盛んになるのに伴って、堀、用水を排雪用として用いることに対する制限が緩和されてきた。

(e)農業用：泉、中村・高島、長坂(省谷川)、中島の各用水はその流路から、主として農業用として用いられていたようである。ところが、辰巳用水のように浅野川と犀川との間を流れる用水でも、分水して小笠野台地及びその下段にある荒蕪地造成のために積極的に用いられたものもある。また、城下主要部を流れる露ヶ野、大野、小松の各用水も、ここでの目的を終えたのち、郡村へ導かれ農業用等に再利用されたようである。

(f)塵介処理用：浅野川と犀川はいずれも川幅が広く、水深がありかつ急流であったため古くから塵介処理のために用いられていた。総構堀、用水もまた塵介の集積場所として広く利用されていたといわれる。とくに、露ヶ野、大野、小松、辰巳の各用水が流れる武家居住地においては塵溜のようなものを活用したことなく、塵介は全用水に捨てられていたようである。

(g)下水用：城下の家屋は通常、周囲を取り巻く下水溝で隣泉と区切られていたから、各家から排出された汚水・汚物は全てこれらの下水溝を経て用水内に放出された。

(h)観賞用：兼六園は泉大・幽遠・スカ・寛古・氷泉・眺望の六勝兼備の名園であるが、辰巳用水の水が兼六園の内部に導かれ、園内にくまなく配された掘水と呼ばれる水路ある、池の水を溜めしその美観を高めようとした。また、鹿山神社・神苑の水はもとより、堀、用水の水も結果的に観賞用としての用途を兼ねたことになった。ここでも、水に観賞的価値を与えた基本は、清澄でかつ良質な源泉の水があったことにある。

最後に、加賀友禅流し、海造等の美術工芸あるいは産業用にも、金沢の水が用いられていた。

参考文献：1)田中喜男、城下町歴次、日本書院。2)田中喜男、加賀藩における都市の研究、文一総合出版。3)神告知夫、江戸時代の上水道についての2,3の考察、第2回日本土木史研究発表会論文集、土木学会、177-180(1982)。4)三壺閑書。5)金沢大学、歴次編纂委員会編、金沢城-その自然と歴史。6)山崎達雄、古都における塵介処理のあやみ、第2回日本土木史研究発表会論文集、土木学会、193-198(1982)。7)田中喜男、金沢再発見-その伝統と清濁、日本書院。